

# インド留学記

その5

## ブーナで 出会った人たち(2)



東方学院講師  
駒沢大学講師  
阿部 慈園

### 三 ゴーカレー先生のこと

所属の大学を退官するとタダの人のように見なされる。つまり、肩書がないとどうも肩身のせまい思いがつきまとう、そのような風潮が、わが国の学界にはあるようです。

こんなことをうそぶく学者もいるとか聞いています。

「肩書がそのひとの実力である」と。

ある意味ではそうかもしれません。しかし、そんなひとに限って、自らのポストに安住して、著書も論文もほとんどなく、教壇に立つて毎年

同じ講義をくりかえしているのが常です。

学人の学人たるゆえんは、学習と思索の継承にあるとわたしは考えます。そして、学習と思索の跡を活字化すること、つまり著作を世に問い合わせ、論文を書き続けることです。それを停止したらもはや学人ではないといえましょう。

インド・ブーナのP・V・ババット先生、V・V・ゴーカレー先生は大学を退官され、自由の身になられてからも、黙々と研究活動を続けて



ゴーカレー先生は、マハーラーシュトラ州の最上級のコーカナスター・バラモンの家に生まれました。ドイツに学ばれ、中觀哲学の研究でボン大学から学位を取られました。ブーナのフアーガッサン・カレッジやブーナ大学の教授をされたのち、デリー大学仏教学科の長を、ババット先生の後つとめられました。現在八十七歳であられます。

おられる眞の学者といえましょう。かつまた、肩書なしの「P・V・ババット、ブーナ」「V・V・ゴーカレー、ブーナ」だけで世界に通ずる本当の学者です。

今回は、ブーナ留学中にババット先生とともに、強い印象と影響とを受けたゴーカレー先生の人となり、研究態度の一端を書き綴ることにしましょう。

先生は、日本に高崎直道・中田直道・川崎信定・八力広喜・江島恵教先生などの多くのお弟子を持つておられます。特に大乗仏教の権威であると同時に、サンスクリット関係の写本読みに関しては現在世界のトップであられます。

わたしは、昭和四九（一九七四）年一二月か

ら約二年間、ババツト・ゴーカレー両先生の『律經』（ヴィナヤ・スートラ）校訂の仕事のお手伝いをさせていただきました。ゴーカレー先生の綿密な写本解説とババツト先生の該博な教理知識とがあいまって、校訂の仕事がなされていくのを見て、学問研究の真髄をかいみた思いがしました。

たつた一つの単語で、両者の意見があわないとき、討議は三十分から四十分にまで及びます。決して粗悪なテクストを世に出さないという考慮がなされているからです。わたくしの仕事は、北京版チベット訳を大きい字で書き写し、それ

ぞれの単語に『マハーヴィユトパツティ』の訳を付けるということでした。仕事中まれに、わたくしがヒツトを飛ばすと、ゴーカレー先生は「ほう」と優しい視線を投げかけてくれました。

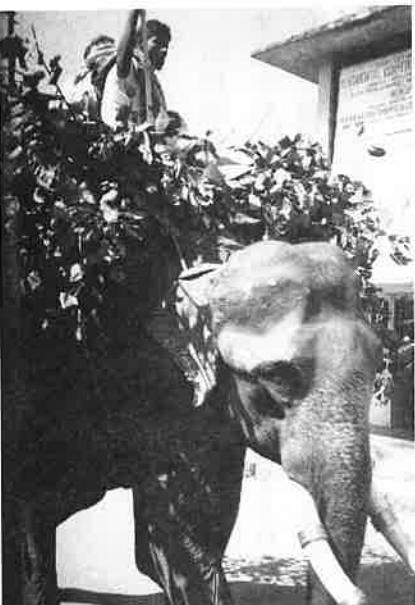
この仕事は毎週火曜と木曜、ババツト先生宅で、朝の九時からなされましたが、十一時半近くになると、ゴーカレー先生は、

「今日はここでやめよう」

といわれます。ババツト先生はもつとやりたそ  
うな顔をされてゴーカレー先生を見つめられま  
す。しかし、ゴーカレー先生の目を気づかわれ  
てか目を伏せられます。そのとき、ゴーカレー  
先生の右目はほとんど失明に近つたのです。の  
ちに、先生は左目に視力を集中させるために、  
より悪い右目を摘出されてしまつたのです。

それゆえ、口悪い八力先生とわたくしは、ゴ  
ーカレー先生に「片目のジャック」、ババツト先  
生には目が小さくかわいいので、「鳩目のババツ

ルというんだ。ハツハーハー



といいながら、花を一輪手わたしてくださったことがありました。「クリシュナ神の蓮」ほどの意味を持つこの花は、紫紺色をしていて、直径は十センチメートルほど。花弁は、六、七枚で、昼間咲く花です。蓮科に属する花ではなく、つた科に属するようです。花の色、大きさ、花のつきぐあいから見て、わが国の「紫鉄線」によく似ています。

ト」というニックネームを呈示してしまいました。もちろん敬愛をこめた呼称ですので、どうか両先生おこらないでください。

3

ある日、何かの用で先生のお宅を訪ねました。先生は庭に出ておられ、わたくしをみとめられて、

「ミスター・アベ、これはクリシュナ・カマ

昭和五七（一九八二）年五月インドの真夏に、わたくしは新婚旅行に留学地を選びました。新妻に、釈尊の生まれた国、自分が留学した所を見せたかつたからです。いや、ブーナの人たちに妻を見せびらかしたかつたのかもしれません。

刺すような熱さを手の先に感じながら、ブー

ゲンビリヤが咲き乱れ、火炎樹が赫々と燃える  
昼さがり、ゴーカレー先生の家のベルを押しました。  
ややあって、先生は、

「ミスター・アベ、よく來た、よく來たね」  
と、大きなあたたかい手をさしのべてくれまし  
た。そして、左目を大きく見開いて、妻を頭の  
てっぺんから、足のつま先まで見やり、

「ミセス・アベ、ウエルカム・ウエルカム」  
と、両手を握りしめました。美味しいイングラン  
ドーと油あげたお菓子をいただきました。

れることを記憶しています。

先生の学的業績は枚挙にいとまがありません  
が、特に、先生には親友でもあつた、高名な數  
学者・インド史家D·D·コーサンビーとともに  
に校訂した古典サンクスクリット詩選集『スバ  
ーシタラトナゴーシヤ』と、世親の『俱舍論偈  
頌』(アビダルマコーラカーリカー)のテクス  
ト校訂が挙げられるでしょう。ともに専門学者  
の絶讚を受けたものです。  
ゴーカレー先生どうか長命であられますよう  
に。

(つづく)

昭和四七年、日本西藏学会の招きで、先生は  
来日されました。東京大学でも講義をされまし  
たが、聽講していたわたくしは英語力の貧しさ  
ゆえに、先生がときにいわれるジョークにワン  
テンポ遅れて笑い声を発し、まわりから一瞥さ